

トピックス
1. 播州日誌 クリスマス休戦を
2. 南国土佐を後にして 第16回



福留経営労務管理事務所  
 姫路龍馬会  
 保険労務士・行政書士  
 福留 章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 72
	2023年12月号

大雪～冬至の候 段々 満ちていく師走に

師走

何とも気ぜわしい 一年最後の月  
 このひと月を どう過ごすかは  
 存外 意義深いものがある  
 次第に終わっていく  
 だんだん満ちていく  
 どう生きるかが その人の  
 今年と来年を決定づける

覚悟を決めて 今年  
 出来なかった事は 新年に譲って  
 一年が終わるのではなく  
 段々満ちていくと考へたい  
 終わり良ければ総てよし

車の事故や病氣入院もあり  
 年齢を考えさせられた年

元気でいたい 美しく年を取りたいは  
 すべての人の希望  
 それでも 老 病 死 の影が忍び寄る  
 希望をなくして仕舞っては  
 生きる意味がない

まだまだやるべき事や  
 やり残した事がある  
 だから生きる  
 あきらめずに生きる



冬至 (12月20日)  
 1年中で最も日が短く 夜が長い  
 太陽の位置が最も低くなる  
 太陽の力が 段々弱くなり  
 底になった時 それが冬至  
 底である以上 もう上がるしかない

一陽来復  
 翌日からの太陽は 力を取り戻し  
 一日一日 日が長くなっていく  
 そう考へた先人は  
 冬至の夜に「柚子(ユズ)湯」をつかう  
 その香気は穢れを除き 邪氣を払う

新しい太陽の力を信じて  
 身を清め 太陽の復活を祈る

気忙しさの中にも 充実感があり  
 大みそかに向かつて  
 心も体も 満ちていく  
 そんな年の暮れであって欲しい  
 新しい力が みなぎるのを感じながら

皆様にとっても  
 最後の1か月  
 満ち足りた思いで  
 過ごせますように 祈ります



# 播州日誌

## クリスマス休戦を

世界中の紛争を数え上げれば、十指に余る。

中でも今年勃発したパレスチナとイスラエルの戦争は、凄惨（せいさん）を極めた。人質を取り、人間を盾にすることが日常になっているパレスチナ。それを見越して病院や学校を空爆・攻撃するイスラエル。憎悪が憎悪を生む負の連鎖は永遠に続くのだろうか。憎悪と憎しみは新しい報復の種になる。底知れぬ領土問題は双方が認めあい譲り合うことでしか解決しない。数次の紛争の繰り返しは、この問題の複雑さと困難さを表している。



国連の安保理は、停戦決議を採択するのが精一杯で、実効性はない。連日ように伝えられる悲惨な闘いで、時間の経過とともに死傷者が増え続ける。もう大きく1万人を超えている。行き場を失くした難民の群れは危険と飢餓にさいなまれ、地獄の中でさまようしかない。子供たちが血と汗と埃にまみれながら「どうしたらいいのか教えてください」と訴える、悲痛な叫びが、胸に鋭く突き刺さり、耳から離れない。

この世に神はいないのか。何が正義で何が不正義なのか。外野からの声は現地に届くはずがない。世界中の諸国の首脳たちが、叡智をしばって停戦と両国の共存の実を挙げなければならない。少なくとも12月にクリスマス休戦が実現し和平の道が開かれることを切に願う。

2023.11.23

\*奇しくも24日停戦が実現。パレスチナ、イスラエルの人質交換による4日間の停戦とパレスチナへの人道支援物資の大量投入が合意された。



## 第7回 社労士 野口 亮 がゆく

今日の予定は赤穂方面。最後に相生の労基署で就業規則の変更届を提出の予定。その途上国道2号線を西に走行中の、10時10分頃印刷業の会長さんから緊急の電話。

「先生、何とかうちに来てもらえませんか」「一昨日雇い入れた人が、朝から仕事もせず、会社に対する暴言を吐いて、手が付けられない。」「すみません、赤穂に向かっている時間が取れません。本人と直接電話できませんか」「いやちょっと手が付けられない。労働条件の明示もしないような会社はブラック企業だとか何とか」「わかりました。携帯で直接話をしますので、電話番号を」車を空き地に入れ、電話を入れる。

「もしもし、顧問社労士の野口です。落ち着いて何が不満なのかおっしゃって下さい」

「社労士、それがどうした。採用しておいて労働条件の明示もなく、労働契約書の交付もない……」「会社に確認したところ、あなたの住所がはっきりしない。履歴書、免許書、あなたの申告の住所がそれぞれバラバラで……」「会社としては、住所のはっきりしないようなものと労働契約を交わす訳にはいかない。」「わかったそしたら、労基署へ行ってどちらが正しいか、決着をつけてやる」「あなたが労基署へ行くことを止めることはできない」「どうぞ御自由に……」「明日は私も会社の方へ行っています」

結局彼は、まず求人広告社のカウンターで「お前とこの会社は、労働条件の明示もしないような会社の求人広告を受けるのか。責任者を出せ」と大騒ぎ。労基署の窓口でも大声を出して荒々しく苦情を言って監督官に食って掛かったという。「お前らがしっかりせんから、あんな会社がはびこるんや。さっさと行って指導してこい」と叫んだという。

翌日会社訪問をして事実関係を調べる。住所のあいまいさを指摘した事から、乱暴が始まったという。原則として労働条件の明示や労働契約書の交付は入社時速やかに実施しなければならない。と、言っても2~3日の時間を要しているのが一般的。少々危険を感じたが本人と面談する。これまで新聞の拡張員の仕事をしていたと言う。できるだけ穏便に話をするため、とりあえず3日分の賃金と解決金の支払いを提案する。やはり目的は金だったのだろう。意外とすんなりと、こちらの提案を受け入れた。

面接をした社長さんと話をする。面接は水際だから慎重に。履歴書や面接の態度もしっかりと見てとアドバイス。社長も「いい勉強になりました」

とりあえず一件落着。まじめな会社なので日常に戻るのに若干時間がかかったが。野口は暴力的な人の入社を阻止できた結果に満足しながらも、彼の理不尽さを思うと、何となく苦々しいしこりのようなものを感じていた。



## 創作 ショートストーリー 土佐のしばてん 河童の河流れ

土佐の高知に住み着いた妖怪。しば天狗、通称「しばてん」。妖怪だけに地獄耳。世間の色々なうわさ話などが入ってくる。朝倉というところを本拠とする能勢組。親分は能勢寅太郎。人呼んで能勢虎。夜な夜な賭場を開帳してアコギな稼ぎをしているという。最近身を寄せてきた銀二という胴振りにイカサマをさせて、たいそうな稼ぎ。連日大賑わいとか。始め勝しておいて、後半締め上げる。素人衆が適うはずがない。取り立ての厳しさに首をくくるものも現われ、遠方へトンずらすものが出る始末。一人二人と窮状を訴えるものがあり。しばてん「さて俺の出番ぜよ」と正義感を募らせる。ドロンと妖術を使って妙齢の女に。木の葉の金を引っ提げて賭場に入る。

他を圧する迫力。注目されながら賭場の中央に腰を据える。やがて立膝となる、その妖艶なこと。丁半賭博。一番二番と進むうちに、胴振りの調子がおかしくなって、素人衆の中でも勝つものが続出。そこで能勢虎が動いた。銀二に合図を送ってイカサマの大一番。しば天はここぞとばかり、大掛けして胴元の金を巻き上げてしまう。それはそうだサイコロの目を妖術で好きなように揃えるのだから、負けるはずがない。異変を感じた能勢虎「賭場荒らし」と難癖をつけて大立ち回り。

さすがのしばてんも、その剣先をかわすことが出来ず腕に傷を負う。今日はこれまでと、半分正体がばれかけたのをシオに賭場から逃げ出す。子分たちが大騒ぎで後を追う。しばてん、とっさの判断で橋の上から鏡川へドボンとダイビング。追手は土手を走り回って追ってくる。傷を負ったしばてん、普段のように泳げない。

不覚にも川の流れに押し流される始末。しばてん自嘲気味に「これがほんとの、河童の河流れと一言。何とか岸にたどり着き、隠れ家たどり着いたのはもう夜明け前。傷口に酒を吹きかけて包帯をぐるぐる巻きにする。

数日後。この騒ぎが元で、奉行所の取り調べがあり、能勢虎は投獄されてしまう。我に返った素人衆もそれぞればくちのことは忘れ



て生業に精を出し、町は元の平穏を取り戻した。めでたし、めでたし。まっことよかったぜよ。まだ癒えぬ傷を見遣り乍ら満足げに一息ついたしばてん。「まっこと、よかったぜよ」

## ～南国土佐を後にして～

### 第 16 回 「三島編」

### 青春のかたまり



三島での 1 年間。15 名の下宿生たちとともによく話しよく笑い、それはいつの間にか夜明けを迎えるほど夜を徹することもあった。トラブルという程のことは何もなく、各地から集まってきているのでそれぞれお国自慢もあって知識が広がった。個性的な人が多く高知では味わえない多くのものを得た。

親がスーパーマーケットを経営しているという彼のところへは月に一度ぐらいの割合で大きな荷物が届く。その日の夜はいつの間にか彼の部屋に 7～8 人の者が集合していた。目的は送られてきた荷物の中身で、

色々な食品が詰まっていた。そのご相伴に預かるのである。特に楽しみだったのが酒類で、ウイスキーが必ず 1 本入っていた。それも垂涎の「髭のニッカ」。私たちにとってそれは格別のものだった。普段飲むとしたら「サントリーレッド」「ハイニッカ」格上の髭はとてつもなく高級だった。それを湯のみ茶碗に入れて飲む。もちろんストレート。氷などあるわけがない。たいがいその夜は午前様であった。

何とも厚かましい話でもある。

もう一つの楽しみは、窓から見える富士山。見えると言っても直接ではなく、窓から身を乗り出して見るのである。3776 メートル。雄大で美しく神々しくもある。残念ながら富士山はほとんど雲に覆われていてその姿を見せない。1 年のうち何十日ぐらい、晴天の日にその全容を見せる。美しいその景観は、今も記憶の中に鮮明に残っている。富士登山を目指した仲間もいたが、7～8 合目あたりで膝を折った。

1 日だけ有志が金を出し合ってレンタカーを借り、5 人ほどで伊豆半島を観光した。仲間同士の珍道中。途中すれ違った女子に声をかけたり、よくまあそんなことが出来たなあというぐらい、はじけていた。青春そのものだった。印象に残っているのが「浄蓮の滝」その水量の豊かさと、落下する力強さに圧倒されたことを覚えている。仲間の実家にお世話になって、知多半島に遊び、京都の祇園祭の宵山も経験した。高知へも 2 人来て頂いた。桂浜、室戸岬、龍河洞など案内した。いい思い出が出来たと喜んでた。

何もかも夢のようだった。貧しかったが、輝く未来しかそこにはなかった。三島での 1 年間は「青春のかたまり」のような思い出に彩られている。

下宿のおじさんやおばさんももう随分な年だろうし、仲間たちもそれぞれ人生を闘い、今はその矛を納めて、隠居生活を楽しんでいるのだろうか。



# 冬季休業のお知らせ

12月28日(木)～1月4日(木)までです。

今年もありがとうございました。良いお年をお迎えください。